

第 10 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(北方領土青少年等現地視察支援事業・貝殻島灯台の望見)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目 次

1	発刊にあたって	1
2	実施要項	2
3	入賞作文の選考について	3
4	入賞者一覧	4
5	授賞式風景	6
6	歴代最優秀賞受賞者一覧	7
7	京都府北方領土教育者会議について	8
8	入賞作文	9

○最優秀賞

京都府知事賞	京都府立園部高等学校附属中学校	十 倉 希 望
京都市長賞	京都市立嵯峨中学校	児 玉 宜 伸

○優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立鳥羽高等学校	荒 居 祐 実
京都市教育長賞	京都市立東山泉小中学校	畑 中 朱 里
北方領土問題対策協会理事長賞	南丹市立園部中学校	松 本 佳 乃
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立開晴中学校	中 山 葉 月
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	宮津市立宮津中学校	竹 本 雪 輝
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立洛水中学校	門 田 海
京都新聞賞	亀岡市立東輝中学校	面ヶ開 麻 衣
京都新聞賞	京都市立烏丸中学校	谷 井 亜斗夢
KBS京都賞	宮津市立養老中学校	藤 原 裕 希
KBS京都賞	京都市立嵯峨中学校	濱 田 和 成

○佳 作

佳 作	京都市立洛水中学校	大 西 愛 実
佳 作	京都市立中京中学校	八 田 美 緒
佳 作	京都市立嵯峨中学校	池 内 里 桜
佳 作	京都市立烏丸中学校	福 岡 琉
佳 作	京都市立嵯峨中学校	井 上 莉沙子
佳 作	南丹市立八木中学校	八 木 亨
佳 作	南丹市立殿田中学校	芦 田 菜 摘
佳 作	京丹波町立和知中学校	山 口 紘 弥
佳 作	京都府立園部高等学校	岡 本 湊 奈
佳 作	京都府立須知高等学校	南 誉

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも回を重ね、今回で記念すべき第十回を迎えることができました。これも関係のみなさまの御理解と御協力のたまものと、心から厚くお礼申し上げます。

この間、北方領土を取り巻く情勢も変遷しています。特に最近では、日本の取組や願いに反して、厳しい状況にあると言えます。北方領土返還に向けた外交は引き続き進められていますが、ウクライナ情勢が悪化し、欧米、日本もロシアに対して経済制裁を発動するようになりました。その間、メドベージェフ首相が北方領土を視察したり、北方四島を含めた千島列島の開発を進めたりするなど、ロシア側の実行支配が加速しているようで、北方領土の返還にとって困難な状況を呈しています。

このような情勢を目の当たりにしますと、怒りとともに、失望感を抱いてしまうことがあるのも実際のところですが、しかし、どんな状況であろうと、中高生たちは真摯にこの問題を捉え、真正面から誠実に作文を書いてくれます。そのような態度にふれると忸怩たる思いが込み上げ、むしろ私たち大人が子どもたちのひたむきな姿に勇気づけられ、「また頑張ろう」という思いにさせられているのが現実です。

今回、知事賞を受賞した京都府立園部高等学校附属中学校の十倉希望さんは、その作文の締めくくりで次のように述べています。

「私たちはもつと北方領土に関心を持たなくてはならない。北方領土問題を国と国という大きな問題としてではなく、人と人という自分にとつても身近な問題として捉えていかなければならない。その上で問題への関心を高め、考え、行動していくことが必要だ。・・・これからの国を支えていく立場になる一人として、今回の学びをしっかりと心に留め、向き合っていこうと思う。」

また、京都市長賞を受賞した京都市立嵯峨中学校の児玉宜伸さんは、以下のように結んでいます。

「北方領土問題には、人権問題が深く関わっている点を忘れてはならない。また、北方領土問題の解決には、私たち一人ひとりの正しい歴史認識、そして何よりも、問題解決に向けての日本国民全体の意識の高揚が、交渉の後押しとして大切であると実感した。」

表現こそ異なりますが、最優秀賞を受賞した二人ともが、自分の問題として捉え、国民的な課題として意識を高めていくことの重要性を強調しています。作文コンクールを実施するねらいの一つとして、正に二人が述べているように、国民の意識を高揚させ、外交を後押しするうねりにまで高め、広めていく基盤にすることがあげられます。

ところで、ここ数年、応募作品数は千五百点前後、応募学校数は十数校前後で推移し、横ばい状態にあります。今回の第十回を機に、生徒の作文が果たす役割の大きさを再確認して、さらにこの取組を拡充させたいと心新たにしていますので、引き続き、皆様方の深い御理解、御協力と温かい御支援をよろしくお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんや御指導いただいた各校の先生方に感謝申し上げますとともに、御後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立高等学校連合会（独立行政法人）北方領土問題対策協会、京都新聞・産経新聞京都総局・KBS京都の皆様をはじめ、関係の皆様は厚くお礼申し上げます、発刊の言葉とさせていただきます。

平成二十八年二月六日

北方領土返還要求京都府民会議
会長 植田喜裕
京都府北方領土教育者会議
会長 西田三郎

平成27年度 第10回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

- 1 趣 旨 京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。
- 2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議
- 3 後 援 京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会・京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会・京都府私立中学高等学校連合会
(独立行政法人)北方領土問題対策協会
京都新聞・産経新聞京都総局・KBS京都
- 4 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)
- 5 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成27年12月11日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚程度
(4) 応募先 京都府北方領土教育者会議事務局
〒622-0041 京都府南丹市園部町小山東町藤ノ木21
京都府南丹教育局内 小森宛 TEL 0771-62-0352
- 6 審 査 主催者において選定した審査員により審査
- 7 表 彰 (1) 賞の設定
最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞賞 2点
・KBS京都賞 2点
佳作・入選 若干点
(2) 表彰式
平成28年2月上旬
(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)
- 8 その他 ・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。

入賞作文の選考について

1 応募の状況

応募校	22校	応募点数	1471点
-----	-----	------	-------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	役職(所属)
松本和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京丹波町教育委員会教育長)
西田三郎	京都府北方領土教育者会議会長 (京丹波町立蒲生野中学校校長)
宮田功	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市立松原中学校校長)
小森誠	京都府北方領土教育者会議事務局長 (京都府南丹教育局総括社会教育主事)
杉村朗	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市総合教育センター指導主事)
高垣明夫	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立洛友中学校校長)
山崎直人	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立嵯峨中学校副教頭)
中井悠太	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立嵯峨中学校教諭)
能登英夫	北方領土返還要求京都府民会議副会長
野村啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
山本哲也	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
土淵誠	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

- ・別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・このコンクールも10回目を迎え、府内の中学校・高等学校にもかなり浸透してきたが、今後さらに多くの学校が応募できるような取組を進めたい。
- ・作文の内容をみると、社会科の授業内容を深化させ、条約や宣言文などを読み取りながら平和的解決の糸口を見いだすこと、国民の関心を高めることの重要性を述べた作品が多く見られた。

第10回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募作品数：1471点

氏 名	学 校 名	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
十 倉 希 望	京都府立園部高等学校附属中学校	3 年
最優秀賞（京都市長賞）		
児 玉 宜 伸	京都市立嵯峨中学校	2 年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
荒 居 祐 実	京都府立鳥羽高等学校	3 年
優秀賞（京都市教育長賞）		
畑 中 朱 里	京都市立東山泉小中学校	9 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
松 本 佳 乃	南丹市立園部中学校	1 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
中 山 葉 月	京都市立開晴中学校	3 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
竹 本 雪 輝	宮津市立宮津中学校	1 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
門 田 海	京都市立洛水中学校	3 年
優秀賞（京都新聞賞）		
面ヶ開 麻 衣	亀岡市立東輝中学校	2 年
優秀賞（京都新聞賞）		
谷 井 亜 斗 夢	京都市立烏丸中学校	1 年
優秀賞（KBS京都賞）		
藤 原 裕 希	宮津市立養老中学校	3 年
優秀賞（KBS京都賞）		
濱 田 和 成	京都市立嵯峨中学校	2 年

※ 京都市立東山泉小中学校は中学3年を9年と表記しています。

※ 氏名等には常用漢字を使用しています。

第10回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校 名	学 年
佳 作	大 西 愛 実	京都市立洛水中学校	3 年
	八 田 美 緒	京都市立中京中学校	3 年
	池 内 里 桜	京都市立嵯峨中学校	3 年
	福 岡 琉	京都市立烏丸中学校	1 年
	井 上 莉 沙 子	京都市立嵯峨中学校	2 年
	八 木 亨	南丹市立八木中学校	2 年
	芦 田 菜 摘	南丹市立殿田中学校	2 年
	山 口 紘 弥	京丹波町立和知中学校	2 年
	岡 本 滯 奈	京都府立園部高等学校	1 年
	南 誉	京都府立須知高等学校	2 年
入 選	田 中 智 広	京都市立久世中学校	3 年
	津 田 龍 平	京都市立上京中学校	3 年
	澁 谷 京 香	京都市立開晴中学校	3 年
	田 中 美 央 里	京都市立東山泉小中学校	9 年
	平 林 宏 太	京都市立洛水中学校	3 年
	藤 田 真 優	宮津市立宮津中学校	1 年
	早 石 真 唯	与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校	2 年
	阿 部 文 音	京都府立鳥羽高等学校	3 年
	穴 穂 優 季	京都府立園部高等学校	1 年
	守 田 昌 弘	京都府立園部高等学校附属中学校	2 年

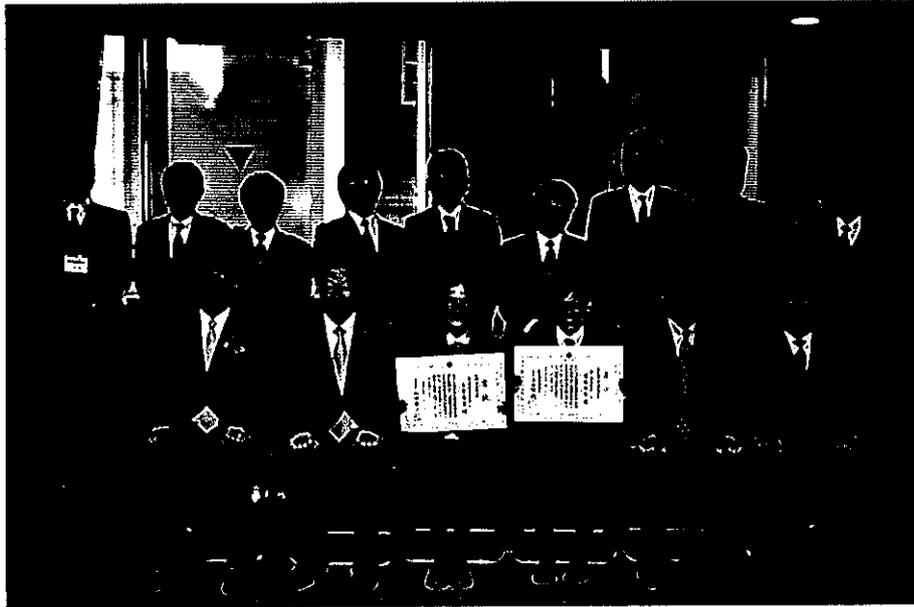
※ 京都市立東山泉小中学校は中学3年を9年と表記しています。

※ 氏名等には常用漢字を使用しています。

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

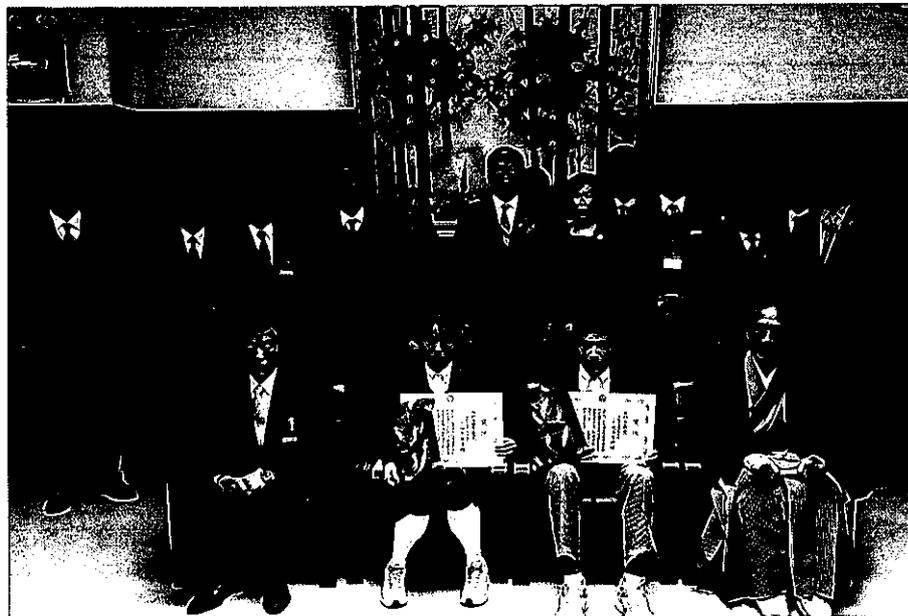
平成28年1月20日 京都府庁



山田啓二京都府知事、小田垣 勉京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

平成28年1月12日 京都市役所



門川大作京都市長、在田正秀京都市教育長から賞状が授与されました。

歴代最優秀賞受賞者一覧

(平成18年度～27年度)

	京都府知事賞	京都市長賞
1	長岡第二中学校 安川 愛佳	京都市立高雄中学校 寺島 千尋
2	京都府立洛北高等学校附属中学校 村上 花	京都市立堀川高等学校 藤田 紫穂
3	京都府立園部高等学校 大森 しおり	京都市立松尾中学校 杉浦 由佳理
4	京都府立園部高等学校 奥村 麻衣	京都市立嵯峨中学校 木村 瑞季
5	亀岡市立東輝中学校 加藤 優生	京都市立嵯峨中学校 卯滝 由季
6	京都府立須知高等学校 星山 紗輝	京都市立伏見中学校 中西 ひなた
7	宮津市立栗田中学校 池永 佳菜子	京都市立伏見中学校 大澤 未希
8	大山崎町立大山崎中学校 浅野 陽香	京都市立伏見中学校 岡嶋 良太郎 ※全国スピーチコンテスト：奨励賞
9	京都府立鴨沂高等学校 石田 裕貴 ※全国スピーチコンテスト：北対協理事長賞 京都府立園部高等学校附属中学校 花阪 大輝	京都市立嵯峨中学校 田中 亜門
10	京都府立園部高等学校附属中学校 十倉 希望	京都市立嵯峨中学校 児玉 宜伸

(応募数・応募校数)

1	404点	20校	6	1481点	15校
2	895点	25校	7	1430点	18校
3	1938点	33校	8	1740点	18校
4	1304点	20校	9	1545点	18校
5	1979点	24校	10	1471点	22校

京都府北方領土教育者会議について

- 1 設 立 平成18年
- 2 設立趣旨 北方領土問題の解決のために、次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。
- 3 会 員 京都府内の中学校・高等学校教員等
- 4 主な取組
 - 「北方領土と私たち」作文コンクールの実施（平成18年度～）
 - ・例年1,500点ほどの応募があり、今回で10回目となる。
 - 実践推進指定校事業の実施
 - ・2校（活動支援経費10万円）研究授業の公開、作文コンクールへの参加
 - 各種研修会等への参加
 - ・北方領土（択捉島・色丹島・国後島）への教員や中・高生の派遣
 - ・視察研修事業（根室市域）への教員や中・高校生の派遣
 - ・近畿ブロック研修会への教員や小・中学生の派遣
 - 「北方領土全国スピーチコンテスト」への参加
 - その他、北方領土教育に関する事業の実施・調整 等
- 5 組織体制
 - 会長（1） 副会長（1） 事務局長（1） 事務局次長（1） 運営委員（若干名）

●各種研修会等への参加状況について

（参加者実績：教員＋生徒）

年度	北方四島交流	教育指導者研修 （根室市）	視察研修 （根室地域）	近畿ブロック研修会 （6府県）	備 考
24	国後3	2		17（滋賀）	
25		2	28	43（京都）	
26		2		22（大阪）	
27	国後2、択捉1	2	20	18（兵庫）	

● 実践推進指定校について

年 度	19	20	21	22	23	24	25	26	27
京都府	園部高	園部高	園部高	東輝中	東輝中	日置中	南桑中	城北中	和知中
京都市	八条中	伏見中	大枝中	山科中	嵯峨中	西賀茂中	烏丸中	中京中	上京中

入賞作文

最優秀賞(京都府知事賞)

北方領土という故郷

京都府立園部高等学校附属中学校
三年 十倉 希望

私に北方領土への興味を抱かせたのは、国後島を写した一枚の写真だった。緑や黄色のカラフルな屋根、舗装された道路、教会の尖塔、かつて日本人の人々が生活を営んでいた故郷。それはたくさんの思い出が詰まった温かい場所、いつまでも居たい心が休まる場所だ。しかし、今その面影はほとんどなく、ロシアの町と化していた。ロシアに占領されて自由に土を踏み歩むこともできない上、島に戻れたとしても記憶の中で懐かしむしかないなんて……何としても北方領土を返してもらいたい。そんな気持ちだが、私の中に芽生えた。しかし、ロシア化が進んでいるという事は、ロシア人島民にとってもなじみ深い場所となりつつあるという事だ。だから、北方領土をどちらか一方のものとして争っているのは、本当の解決にはつながらない。ではどうすれば良いのか。私は様々な人の声を調べ、考えてみることにした。

まず調べたのは、日本人元島民の声。やはり「故郷を離れるのは辛かった。」「二日も早く故郷へ帰りたい。」という思いが多いようだったが、意外なことにロシア人を憎く感じているというような内容のものはあまりなかった。また、ソ連軍が北方領土へ侵入してから数年間、日本人とソ連人が共に協力して暮らしていたことも分かった。その中で日本人元島民のある方は、ソ連兵に対して「いい人たちだなあ。」という思いを抱き、一方でソ連人からは「仲良くしたい。」と言われたこともあったそうだ。

次に、ロシアの人々の声。平成二二年に外務省が行った調査では、北方領土は現在も今後ともロシアに帰属

するという考えが五三%、日本に帰属すべきという考えが三%、両国が互いに合意すべきだという考えが二%だった。自国の国民が住む場所を自国の領土かと思われたらYESと答えるのが自然だと思うから、ロシアの領土だとする考えが最も多いのには納得したが、それとは違う意見に三〇%以上もの人が賛成していることに驚いた。また、島の子供たちは「北方領土は自分たちの大切な故郷であり、大学進学のために島を出ても大人になったら戻ってきたい。」と考えていることも知った。

そして最後に、私たち日本国民の声。「柔軟に対応していくべきだ。」という考えが高い割合を占める一方で、北方領土問題についてあまり知らない人や興味がない人も多かった。

これらの調べから、私が考えた北方領土問題の解決策は、「共存」を前提にした返還だ。日本もロシアも共に平和的な解決を望んでいるし、過去に共同生活をしたこともある。そして何よりも、北方領土が両国の島民が帰ることのできる故郷となるために。言葉や文化、国民性など様々な違いはあるけれど、長い歴史の中で異なる文化や宗教を広く受け入れてきた日本と、人一倍親切だと言われるロシア。お互いの良さを知り、理解しようとする気持ちを持って、共に暮らしていくという解決ができると思う。

また、私たちはもつと北方領土に関心を持たなくてはならない。北方領土問題を国と国という大きな問題としてではなく、人と人という自分にとって身近な問題として捉えていかなければならない。その上で問題への関心を高め、考え、行動していくことが必要だ。

北方領土問題の真の解決。いつ実現するのかも私の小さな力をどう役立てられるのかもまだ分からない。しかし、これからこの国を支えていく立場になる一人として、今回の学びをしっかりと心に留め、向き合っていくように思う。

最優秀賞(京都市長賞)

北方領土問題に対する意識の高揚

京都市立嵯峨中学校
二年 児玉 宜伸

二〇一五年二月、日本は旧ソ連・ロシアによる北方四島の不法占拠から七十年目の節目を迎えた。日本は四島の返還に向けて、歴史的事実を歪めるロシアの姿勢を改めさせるとともに、即時返還を求める具体策を検討しなければならぬ。

外交の歴史を振り返ると、二〇〇〇年にプーチン大統領が登場して以来、返還交渉には目立った進展は見られない。北方領土は先の大戦の結果、正当にロシアの領土と述べるなど、ロシアは歴史を歪める強硬な姿勢を崩していない。クリミア半島の併合やウクライナへの軍事介入など、この一年のロシアの外交を見ても、相変わらずの理不尽さには驚き、失望するばかりである。

今年の八月、「北方領土青少年等現地視察支援事業」に参加する機会に恵まれ、北海道の根室を訪ね、北方領土問題の背後にある深刻な人権問題について学んだ。北方領土の元島民は、第二次世界大戦が終結した今も、その余波を受け、苦悩の日々を送られている。終戦後、旧ソ連軍の侵攻により、北方領土の多楽島から強制的に北海道の本島に移住させられた島民の体験談によると、時が経てば故郷の島に戻れるという期待を持ち続けておられるということである。しかし、現実にはすでに七十年もの年月が経過している。現に、約一万人もの元島民の方が亡くなり、望郷の念を抱く約七千人

の方の平均年齢が、八十歳に近いことを考えると、この問題は即時解決を図る必要があると認識した。現地視察の際に、納沙布岬から国後島を目にした時、元島民の方々の積年の苦しみを実感できたように思った。わずかに十数キロしか離れていないところに故郷があっても、その土を踏めない無念さを思うと今も本当に心が痛む。

北方領土問題は、ロシアとの外交問題であり、確かに様々な利権と国益が関わっている。日本政府の中には、これまでのロシアとの交渉を踏まえて、歯舞群島・色丹島の返還を実現させるべきであるという議論がある。と聞いている。この考え方は、四島返還を断念するかのような発言にも聞こえる。しかし、このような妥協案では、歴史を歪めるロシアの理不尽な態度に屈するのと同じである。日本国として毅然とした態度を示し、四島返還に向けた交渉を進展させてもらいたい。北方領土問題には、人権問題が深く関わっている点を忘れてはならない。また、北方領土問題の解決には、私たち一人ひとりの正しい歴史認識、そして何よりも、問題解決に向けての日本国民全体の意識の高揚が、交渉の後押しとして大切であると実感した。

北方領土と私たち

京都府立鳥羽高等学校
三年 荒居 祐実

現在、北方領土問題が重要視されている中、竹島や尖閣諸島をめぐる問題もしばしば起こっている。こうした領土問題は、私が日常生活を送る上で支障をきたすかという点、そのようなことはない。だが、こうした問題が外交関係の悪化へと繋がると、自国のプライドを捨てること、強まり続けると、それが後に「戦争」「紛争」などを引き起こすことになる。今、こうした問題を私たちは他人事のように見るのではなく、自国で起こっている問題として自分はどう感じているのか、などと身近な問題として理解を深めていくことが必要だと感じる。

そして実際に、こうした問題について目を向けると、沢山の疑問が浮かんだ。とても単純な考えではあるが、「一緒に住むことは出来ないのか」「どちらの領土なのかをはっきりさせる必要があるのか」などと考えた。このような考えに至ったのは、北方領土を訪れた日本人に対するロシア人の接し方や歓迎の様子を目にしたからである。料理や踊りなどでもてなし、また気さくに話しかける様子がうかがえた。彼らのそういうことな様子は、ここに領土問題が起こっているというところなど考えさせないようなものであった。本当にここを奪い合うことを続けるべきなのであるか。このままの関係を保ったままではいけないのだろうか。北方領土に住む人々の人柄を知れば知る程、このような考えを

持つようになった。個人として分かり合うことが出来たとしても国同士が理解し合うことが出来ないということ、とても残念である。

そんな中、外国が日本の弱みを利用していることを知った。決して戦争を起こすことのない国、平和主義の日本。この世に、争いを起こさない国であること。このことこそが、弱みとして存在しているのである。だから外国は、攻めても攻め返されることはないだろうという考えのもとで攻め入ってくるのである。

しかし、外国が考えているこの弱みこそが、実は日本の強みになるかもしれない。絶対に武力に頼らず粘り強く交渉する平和外交は、武力以上の力を発揮するかもしれない。そのためにも、今大切なことは、国民全体が一致してこの問題に関心を寄せることである。力に対して力で対抗したのでは、個人として分かり合える日本人と北方領土にいるロシアの人々との間にある関係を台なしにしてしまう。

このような問題を国として抱えている今日、私たち一人一人が国の為になることは、どのようなことだろうか。北方領土とは基本的に誰もが自由に行き来が出来るところではない。そこにしかないもの、そこでしか感じるものが出来ないものがあるのだろうか。だからこそ、誰もが北方領土に親しみを感じ、身近なものとして考える必要があると思う。そのために、北方領土に住む人々との交流、行事、文化などを共有していけるような外交関係を築いていくこと。そのことが、これからの日本の課題であり、私たち一人一人としての課題である。

私たちは、日本が抱える領土・主権問題をきちんと捉え、そして互いの国を想い、尊敬しあうことを忘れてはいけない。

優秀賞(京都市教育長賞)

あなたは北方領土を知っていますか

京都市立東山泉小中学校
九年 畑中 朱里

あなたは北方領土問題を知っていますか。北方領土とは、北海道の北に位置する四島のことを指します。

日本人が北方領土の存在を知ったのは三百九十年以上も前だと言われています。北方領土周辺は豊かな水産資源に恵まれ、多くの魚介類が捕れます。また、気候は寒暖の差が比較的緩やかなため、植物も育ちやすく人間が住むのに適した場所です。

そこで、私はそんな北方領土の問題に着目しました。ニュースや新聞でよく見る「北方領土問題」で対立しているのは日本とロシア。

北方領土は日本人がより早くその存在を知り、渡航し生活してきました。一八八五年には条約を結び日本の領土として認められました。しかし、日本の領土である今の北方領土には日本人がいません。それはロシアが日本との条約を破り、自分勝手な行動をして北方領土を占領してしまったからです。しかし、ロシアによる北方領土の占領は国際法的な根拠はなく不法占拠しているものであり、そこは日本領土であって、ロシアの領土ではないのです。このような不当な占領に、北方領土に住んでいた日本人はとても悲しみ苦しんでいます。先祖が、汗水流して開拓してくれた土地なのに、生活すること事もできないし、もう懐かしの風景を見ることだつて出来ません。

自分のことと重ねて考えてみてください。急に知らな

い人たちが銃を手に土足で入ってきて、万年筆や時計などを略奪していったのです。そして、一度逃げれば、その場所にはもう帰れないのです。あなたは耐えることができるでしょうか。

そんな中、前向きに外交交渉は進んでいます。日本とロシアの首脳会談は繰り返し返され、日本は北方領土を日本の領土だと主張し続け、平和条約を締結するため基本的な条件として譲っていません。しかも、北方領土に現在住んでいるロシア住民に人権、利益及び希望を、北方領土返還後も十分に尊重し続けたいという基本的な方針をもつことを前提として、交渉を続けているのです。

また、この問題に立ち向かおうと様々な運動も行われています。初めは文章だけだったものを、多くの世代に知ってもらうため、パネル展や街頭啓発・署名活動などで、よりわかりやすく歴史と現状を知ってもらおうと、体験談を踏まえながらの運動が行われています。

この状況を知れば、あなたは無関心のままで暮らしていないかと思いませんか。誰一人として関係のない人はいないはず。一人ひとりがこの問題の重みを知り、自分の意見をもち交流し深め合うことで、よりよい考えが出てくるのではないのでしょうか。国民が北方領土の現状を正確に知るために、メリットだけでなく、デメリットも含めた情報を得て、正しく認識することで、国民一人ひとり自分の意見をもつて行動できます。これが、今の私たちがやるべきことではないでしょうか。

大きな一歩

南丹市立園部中学校
一年 松本 佳乃

「自分のこととして考える。」家でも学校でもよく耳にしてきました。ある時、クラスメートの持ち物がなくなりまして。先生は「仲間が困っています。自分のこととして考えて、もう一度家でも見てきてください。」と話されました。私はあまり深く受け止めていませんでした。でも次の日、他のクラスメートが「ごめん。間違つて持つて帰つた。」と言つて返却していました。心の中で何かズキツとするものがありました。

今、北方領土には日本人が一人もいないこと、元島民の方々は七十年間も四島を追い出されたままだという事、このようなことを私は最近まで知りませんでした。現在北方領土に住んでいる人はロシア人ばかりで、日本人が行くことは許されていません。でも、そこは日本の領土です。元島民の方々は、晴れた日には肉眼で見える島を見てどんな思いで過ごしてこられたのでしょうか。「早くロシアの人に出て行ってもらって、元島民の人が帰ることができるように行つて欲しい。」ロシアの人は、元島民の故郷を奪つた悪い人たちだ。私は最初こんな風に考えていました。

でも調べていくうちに、北方領土に住むロシアの人々に対するイメージは少しずつ変わってきました。一九九二年から、日本とロシアは「北方四島交流事業」を行つています。これは北方領土問題の解決をめざした、北方四島在住ロシア人との交流です。そこからわかるロシアの人は、私が最初に抱いたものとは違つた姿でした。訪問した日本人を歓迎し、日本のことを「好きだ」と言つてくれたり、日本の文化を勉強したりと、私たちと何も変わらない普通の人がそこにはいました。

そして、一番心に残つたのは、北方四島はもうすでにその人たちの故郷になつていて、大切な場所になつていくという事でした。

私は、本当に「自分のこととして考える」ということができていたのかと、自分を問い直さざるを得なくなりまして。今、そこに住んでいるロシア人を追いつくと、元島民の方々の思いは晴れても、現住人の新たな悲しみを生むことになりません。七十年前に元島民の方々が味わつた悲劇が繰り返されることになるからです。元島民の人々や今北方四島に住んでいるロシアの人々、その両方の立場に私は十分に立っていません。北方領土は日本に返してもらおうけど、現住人を追い出すようなことはせず、その中で日本人とロシア人が一緒に過ごすという解決方法はどうかと思ひました。

私は最近のニュースなども見られていないし、まだ無関心なところが多いです。しかし、北方領土問題が進んでいないことはわかります。だから、私を含むもつとたくさんの人が「自分のこととして考えるべきだ」と思ひます。日本とロシアの政治家の方々には、「もつと「生の声」を聞いて、その思いに寄り添つてほしいです。」そして両方の国民の一人一人が本当に幸せになれる方策を、話し合ひで前進させてほしいです。そして次は私たち国民一人一人です。これまでの私が思うに「関係ない」というように、自分のこととして考えるには関係ない人が多くいるかもしれない。そしてそのような無関心が、実際に苦しんでいる人にとつて一番悲しいことなのです。

私は、本気でこの問題のことを考え、本当に悲しい思いをして人たちの気持ちに寄り添ひ、自分自身で考えることを見つけていきたいです。私にできることはほんのわずかかもしれませんが、それをこの国の一人ひとりがすることです。大きな一歩につながると信じています。そして私は、その一歩を支える人になります。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土は日本の領土

京都市立開晴中学校
三年 中山 葉月

北方領土は、私達が住む日本という国で、重要な場所になっていきます。択捉島は日本の最北端で、そのあたりは三大漁場の一つでもあります。昔から日本人が暮らしてきたこの土地が、なぜロシアの領土だと主張されるのでしょうか。

私は北方領土についてのビデオを授業で見ました。そこで、疑問を抱き、「おかしいな」と思ったところがあります。それは、今までの歴史を見てきて、北方領土のまわりでたくさん条約が結ばれてはいるけれど、北方領土は一度も条約にかけられたことはないし、どこか外国の領土になったことも一度もない日本固有の領土のはずなのに、ロシアが自分の国の領土だと主張しているところなんです。たしかに、昔ソ連が北方領土を含む地域を占領しましたが、戦争が終わってからは植民地など持たない平和な世界をつくる動きになったはずなんです。それなのに、今もお、北方領土がロシアに占領されているのは絶対におかしいと思います。

私は、四つの島すべてを返してもらわなければならないと思います。なぜなら、島が返されたら、かつて住んでいた人が戻ってきて、また漁やいろんなことが盛んになり、日本がもつと盛り上がっていくと思うからです。また、島を無理矢理追い出された人からしたら、故郷がなくなっちゃったわけですから、一日でもはやく戻りたいと思ってる人もいます。

この問題の解決手段は、話し合いしかないと思います。戦争はもう二度と起こしたくありません。今もお、話し合いが行われているニュースをたくさん目にします。私ができることは、ただただ話し合いが上手くいって、双方が納得のいく結論が出ることを願うだけです。私は政治家ではないので、直接ロシアの人達と話し合うことはできませんが、一つだけ心に決めたことがあります。それは、いくつになっても、「北方領土は日本のものだ！」といつでも自信を持つことです。この問題は、まず国民が自分達の領土だと思わないと始まらないと思います。だから、私はこれを一生貫きます。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

国境を越える笑顔

宮津市立宮津中学校
一年 竹本 雪輝

なぜ、人間同士で奪い合うのでしょうか。第二次世界大戦直後の八月十八日。ソ連が国後島に攻めてきたこの遠い日。多くの日本人が犠牲となり、豊かな生活も次々となくなっていくたに違いない。さらに、それと同時に再び戦争が起ころのではないかという不安が募り、人々の安らかな心までも奪われたに違いない。

最初、私は領土問題に対する深い興味はなく、他人事のように思っていた。しかし、中学校で北方領土について学んだことをきっかけに、私の中の北方領土に向かう興味がどんどん大きくなってきた。そして、ソ連の兵士たちが島をめちゃくちゃにした風景が私の目に焼き付いた。他人事のように思っていた自分自身に罪悪感を感じ、胸が痛くなった。

そんな中、私の心を大きく動かす動画があった。その画面には、日本人とロシア人の少年が一緒に笑っている姿があった。しゃべる言葉も人種の違いもないような笑顔だった。それは「ビザなし交流」というものだった。一九九二年に始まり、日本人とロシア人との交流を深めるためにできたものだ。言葉の違い、文化の違いを理解しあうことは、とても大切なことだと私は思う。第二次世界大戦、一生忘れられないであろうあの悲惨な日々、壁が少しづつ、少しづつ埋まっていくように見えた。この「ビザなし交流」は、これからは国境を越えた笑顔を作り続けてくれるだろう。

でも、私が学んだことは良いことばかりではない。課題が出てきた。それはこの四つの島、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の元島民の意見だった。

「いつかきくと、本当の意味で日本の島に戻りたい。」ということだ。確かにこれまで日本とロシアは共通の認識を持つとうとしたり、東京宣言の交渉などが行われてきた。しかし、いまだ日本のもとへ、あの四つの島々は返ってきてはいない。それはこれからの日本とロシアの努力にかかっている。私はそう思う。

私はこの学習で北方領土問題を深く知ることができた。でも、それだけではない。国境を越えて笑顔がなくなることを喜びを、私は学ぶことができたのである。今回学んだことを私の人生の糧としたい。

本当の意味で四つの島を日本に返してもらうのは、難しいことかもしれないが、夢ではない。そのためには、両国の信頼と努力が必要である。

私は少しでも早く、元島民の方々の願いがかなってほしいと思う。そしていつかきくと北方領土がこの国、日本へ戻ってくるという信念を、私はいつまでも強く持ち続ける。

優秀賞(北方領土返還要求京都府民会議会長賞)

二国が協力するために

京都市立洛水中学校
三年 門田 海

北方領土は、第二次世界大戦後の一九五一年に結ばれた「サンフランシスコ平和条約」において、条約の署名にロシアが拒否したために、現在までロシアに不法占拠されてきた。

僕がこの事実を知ったのは、つい先日の社会の授業だ。それまで僕は日本の固有の領土である「北方領土」について、どのような歴史をふまえ今日に至ったのか、事実に対してあまりに無知だったのではないかと思う。だが、授業で配られたプリントや北方領土の映像に実際に目を通して、不法に占拠された領土なのだから、日本は返還を堂々と主張しなければならぬと思つた。

一九五六年に結ばれた「日ソ共同宣言」以来、ロシアとの外交交渉が始まつた。僕は北方領土が日本の領土だという事実は変わらない真実であり、この領土問題の解決において、この事実をロシアに主張していかなければならない。だが、領土問題の解決は、双方の国の和解から始まると僕は思う。今後、日本とロシアが互いに協力関係を持ち、外交交渉を行うべきだと考えている。

僕は社会の授業でみた択捉島での「ビザなし交流」が印象的だった。実際に現地の住民とともに過ごす中で、理解できることは豊富にある。また、国内でも「北方領土の日」という日が、一月七日に定められている。毎年、この日には東京で、北方領土返還要求全国大会が開催され、全国各地においても大会やパネル展示、キャラバン

活動などが行われている。ビザなし交流を含め、このような活動は国民が北方領土について正しく理解する機会であり、現地の人々に日本人の考えを主張できる交流の場でもあると僕は思う。一人一人が北方領土に対して、強い意志を持つことが、この問題の解決につながるのだ。僕たちは、終戦後、北方領土から家、故郷を突然奪われた約一万七千人の島民がいたという事実を、北方領土が日本の固有の領土である事実を忘れてならない。同時に、双方の理解を目的とする返還の主張に対し、はつきりとした意志を示さなければならぬ。平和条約の日でも早い締結を目指し、友好的に且つ、慎重に主張を続けることが問題の解決への道である。北方領土が「ロシアとの良好な関係への架け橋」となることを僕は信じる。

優秀賞(京都新聞賞)

戦後七十年の重さ

亀岡市立東輝中学校
二年 面ヶ開 麻衣

「北方領土問題」

中学生以上なら、誰もが聞いたことがあるだろう。しかし、誰もが知っているのに、今この問題がどういう状況にあるのか、きちんと説明できる人は少ない。私自身もロシアとの領土問題であること、それが北海道の先の四島だということ、長い間解決されていないということぐらいいし知らなかった。私は、この作文を書くことを機に、北方領土について調べてみた。

なんとこの問題、戦後七十年たった現在でも、結論どころか話し合いもまとまっていけないのである。四島返還にこだわる日本と、それに応じないロシアとでお互い譲らず、ずるずると問題が長引いてしまっているらしい。細かな原因は他にもいろいろあるようだが、七十年経ってもあまり進展していないのは遅すぎるのではないかと思う。

この問題について気になった点がある。それは北方領土に住んでいた元島民の方たちのことについてだ。北方領土は戦前は日本人が住んでいた。しかし、ソ連に占領されてからは、元島民は追い出されてしまった。戦後七十年もたち、元島民には亡くなってしまう。故郷に帰ることができなかつた人がたくさんいるのだ。元島民とその子孫たちは、七十年経った今でも故郷に帰ることを待ち望んでいる。もし将来、北方領土が返還されても、当時住んでいた人たちはほとん

どいなくて、島も長い年月を経て完全にロシア色に染まってしまっている。問題の解決に時間をかけすぎたことが残念でならない。

七十年という期間の犠牲は、元島民だけでなく現在北方領土に住むロシア人たちにも降りかかるのではないかと私は考える。北方領土が日本に返還されれば、そこに住むロシア人たちは土地を離れなくてはならない。七十年あれば世代交代もし、北方領土生まれの子どもたちも多くいることだろう。解決に時間をかけすぎたせいで、北方領土を、故郷を離れなくてはならない人が、今度はロシアに出てきてしまう。問題の終結が遅いほど、故郷を失う人が多くなってしまうのだ。

現在、北方領土問題解決のため日露間で何度も話し合いが行われている。国後、色丹の二島返還案、これに歯舞群島を追加した三島返還案、日露の面積が等分になるように三島と択捉島の一部を日本のものとする三・五島返還案、四島返還案など、様々な意見がある。日本とロシア、お互いが納得できるよう話し合いを重ねるのはもちろん大切だ。しかし、その間にも多くの人が故郷へ帰るのを待ち続けていること、解決が遅いほど故郷を失う人が増えることを忘れてはならない。もう七十年も経ってしまった。過ぎてしまった時間は取り戻せない。私は、一刻も早く北方領土問題を解決させ、悲しむ人を少しでも減らすことを強く望む。

北方領土について

京都市立烏丸中学校
一年 谷井 亜斗夢

終戦記念日を迎え、今年も平和について考えると、国とは何なんだろうかと思う。国のためでなければ一人では人を傷つける戦争はしないだろうと。また、北方領土の問題では国境とはなんだろうと思う。どうして住んでいる人々が法的根拠もなく退去させられるのか。

近年、中国や韓国など近隣諸国との国境争いがある。さらにロシアによる侵攻など平和を脅かす国家間の争いのニュースが数多くみられる。一方、「爆買い」等の言葉ができるなど、中国人観光客を歓迎する人々の友好的なニュースがテレビなどで報じられている。また、中国のほか韓国やロシアはスポーツでの対戦などで交流があり、地理的だけでなく身近な国である。

しかし、第二次世界大戦の終戦当時、ソ連により占領された北方領土はまだ返還されていない。終戦当時、北方領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島では、一万七千人もの日本人が暮らしていたが、すべて強制退去させられ、現在も日本人は一人も住んでいない。当時住んでいた日本人一人ひとりの意思に反して、強制的に退去させられるということとはどういうことなのか。住んでいるのに退去させられ、その土地が外国の支配地となったら、どんなに悲しいことだったのかは想像できる。国がその土地に住んでいる人の意思に反して強制的にその土地を奪っていいのだろうか。その土地に住んでいる人より他の国の方に権利があるというのか、法的根拠も

ないのに。

ロシアだけでなく、中国や韓国とも観光やスポーツで交流し、それぞれ友好を深めている。しかし、国家間では、生命を脅かすような争いが起きている。過去に戦争などの悲しい歴史があっても、その歴史を繰り返さないのが現代人の知恵である。ただ、この問題は戦後七十年が経過し、現在ではロシア人だけが居住しており、解決は困難に思われる。北方領土には豊かな自然や資源があり、ロシアも譲れないだろうが、日本も譲れない。

ただ、一九九一年にソ連側から提案され、一九九二年から始まったパスポートやビザなしの北方四島交流事業により、日本人と北方領土在住のロシア人との相互理解が進んできている。ロシアは隣国でありながら、北方領土問題のために平和条約が結ばれていない。相互の理解を深め、平和条約を結ぶことも期待したい。住民の意思に反した国が、今度は予想に反して、なかなか進展してこなかった北方領土問題を解決してくれないだろうか。現在となつては、平和的にその土地に関わる人々の意思に合致した解決となつてほしい。少しでもこの問題の解決が進展していくように、私たちは北方領土問題についての歴史をはじめ、この問題に関する様々なことを正しく理解していきたい。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土を返還してもらうために

宮津市立養老中学校
三年 藤原 裕希

「北方領土問題」この言葉は、今まで聞いたことはありませんでしたが、詳しいことまでは分かりませんでした。この学習をするまでは、「日本の領土なのに、ロシアが勝手に占領している。ロシアは自分勝手な国だ。」と思っていました。しかし、この学習をして、北方領土問題やロシアという国への考え方が大きく変わりました。

現在、北方領土はロシアに占領されています。ここで一つの疑問が浮かびます。なぜ、日本固有の領土がロシアに支配されているのでしょうか。時代は七十年前にさかのぼります。一九四五年、八月九日、ソビエト連邦が日ソ中立条約を破り、当時日本人が住んでいた北方領土に攻めてきました。日本人は、一人残らず追い出されてしまいました。そして、北方領土はロシアに不法占拠されてしまいました。簡単に例をあげると「自分の家に見知らぬ人が入ってきて、そのまま居座っている。」ということです。

皆さんの中には、「なぜロシアは日本に北方領土を返してくれないのか。」と思っている人も、少なくないと思います。実際私もそう思っていました。しかし、それは大変難しいということが分かりました。なぜなら、その北方領土には今ロシア人が住んでいるからです。先ほどと同じように例であらわすと、「見知らぬ人がそこに家具などを置き、何年もそこに住んで、住み慣れた家になっている。」ということ。だから、急に「こ

こは元々は別の人の家だから、すぐに立ち退きなさい。」とか、「すぐ出て行け。」とはなかなか言えないのです。そういう問題もあり、ロシアへの交渉が難航しています。これらのことから、「日本人はロシア人と仲が悪い。」と思う人も多いと思います。しかし、全員が仲が悪いということではありません。私が見た、あるニュースでは、日本人とロシア人が仲良く交流していました。しかし、北方領土問題が原因でなかなかそのロシア人に会えないと言っていました。日本人は「早くその問題を解決してほしい。そうしたら、私の友人に会えるのに。」と言っていました。私はそういう人達のためにも北方領土問題を早く解決しなければならぬと思います。

この学習をして、今まであまり深く関わったことのないような問題について考えることができました。私は「ここは私たちの領土だからすぐ出て行け。」など言うのではなく、もつともつとロシアとの交流事業を増やせばいいと思います。総理大臣も大統領も人間です。人間を繋げるものは、ただ話し合うことではなく、触れ合うことだと思います。それが北方領土問題を解決する第一歩だと思います。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土について考える

京都市立嵯峨中学校
二年 濱田 和成

皆さんは、北方領土についてどれだけ知っていますか。「私にはあまり関係がないから。」と思っていまいませんか。そんなことはありません。これは日本国民全員の問題なのです。

では、なぜ日本とロシアは北方領土でもめているのでしょうか。そもそもロシア（旧ソ連）の不法占拠から始まったことで、元々日本の領土であり、初めから日本人が住んでいました。しかし、ソ連は当時、北方四島に住んでいた日本人を強制退去させました。この行為はとても矛盾していませんか。先人たちが築いてきた北方領土をあっさりと奪われてしまう。僕たち日本人は完全な被害者なのです。

日本は今までにたくさんの方外交渉を積み重ねてきました。が、「平和条約を締結しよう全力を尽くす。」や「早期解決のために交渉を加速させる。」など、どれもあいまいな答えばかりです。このままでは、本当の真実が塗り替えられてしまします。今年には北方領土問題が発生して七十年という節目でもあります。一刻も早く北方領土を返してもらいたいと思います。

その願いを叶えるべく、たくさんの方々が様々な活動を行っています。署名活動や北方領土展、僕たちが行っている作文コンクールもその一つです。僕たちの願いはただ一つ。あの自然豊かな四島を早く返してほしい。そして、その願いは政府にも届いたのです。毎年二月七日

を「北方領土の日」と制定されました。そして、北海道から全国に広がった返還運動を更に深めていき、全国的な盛り上がりを図るために作られたのだと思います。たくさんの方々の自然に恵まれている北方領土。それはまさに日本の誇りです。我が国日本の大切な財産です。だからこそ、このままで良いはずがありません。そう、これは最初にも述べた通り、日本国民全員が考えなければいけない問題なのです。ですから、今、日本とロシアとの間では何が起きているのか、どこまで解決に近づいているのかなど、自分から調べたり、考えたりするなど、積極的に北方領土問題について「知ること」が大切だと思います。そして、次の世代の子どもたちに「伝えていくこと」がとても大切だと僕は考えます。この「知ること」と「伝えていくこと」を忘れずに生活していくことで、着実に北方領土返還に近づくと信じています。僕はそう信じています。一刻も早く日本に北方領土が返還されま

佳作

北方領土について感じたこと

京都市立洛水中学校
三年 大西 愛実

私は、北方領土問題と聞いても、なんとなくしか知りませんでした。私の周りでもこのような人が多いと思います。つまりこれが、北方領土問題の現実なのだと思ひます。

だから、北方領土問題について一人でも多くの人に知ってもらふ必要があると思ひます。このままだと知らない人が増えていくだけで北方領土について更に関心がなくなっていくだけだと思う。だから語りついでいき、幅広い年代の人たちにも、北方領土について、もっと詳しく知ってもらふことが必要です。

次に、日本の領土(北方領土)の返還をねばり強く交渉する事が大切だと思ひます。北方領土はもともと日本の領土なのに七十年間も占領されているのは、返還してほしいと呼びかけるだけではだめなのでしょう。ちよつとした取組でも、小さいことでも行動することに意味があると思ひます。だからといってロシア人を無理やり追ひ出すというような行動ではいけません。昔の日本がされたことと同じ事をするのは、自分がやられて嫌なことは人にもしたらダメと同じことだと思ひます。どちらの国も納得できる条件で返還してもらふために、何回も何回もあきらめずに根気強く話しあう事をしたらいと思ひます。いろんな形で交渉することが大切です。

最後に、北方領土に現在住んでいるロシア人と交流を深めることが必要だと思ひます。また、私たち日本人が

北方領土に足を運ぶことで、現在の北方領土の状態・様子が自分たちの目でたしかめられ、また、人々の思いを知ることができると思ひます。それは、日本は日本なりの考えをもち、ロシアはロシアなりの考えをもっていると考ええるからです。直接、交流を行うことで考え方の違いに気づき、話しあえることもできると思ひます。

このような小さな取組が、日本とロシアの友好的な関係を築いていくきっかけとなっていくのではないのではないのでしょうか。私たち日本人の目標は北方領土を返してもらふことです。そのためには、お互いの立場などをしっかり考え、その上で友好を築いていくことが北方領土返還への第一歩だと思ひます。私自身もこれからは、人ごとと考えずに、積極的に考えられるようにしていきたいと思ひます。

佳作

北方領土問題に向けて

京都市立中京中学校
三年 八田 美緒

北海道の北にある齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方領土は、日本人によって開拓され日本人が住みつづけた島々だ。しかしこの北方領土は、一九四五年八月の第二次世界大戦終了直後、ソ連軍により不法に占拠された。それから北方領土は日本人が住んでいない、しかも自由に行くことも出来ない島になった。

北方領土の元島民にとって北方領土は自分の故郷であり、たくさんの思い出がつまっている大切な場所だろう。それなのにソ連軍に占領されてとても嫌な気持ちになったと思う。ソ連軍に占領されてから、七十年が経った今、北方領土はまだロシア人だけが住んでいる。

私は北方領土返還に向けて大きく二つのことが重要だと思う。まず一つ目は、この問題をより多くの人に知ってもらうことだ。「北方領土問題」と聞いてもなんとなくは知っているが、詳しいことは知らないという人がほとんどだと思う。昔、北方領土に住んでいた人たちはほとんどいなくなっていく。このままでは問題は解決していかない。そこで、その人たちから北方領土について話を聞き、語り継いでいくことが一番大切だと思う。

そして二つ目に、あきらめずに何度も何度も粘り強く交渉していくことが大切だと思う。近くの人に協力の呼びかけをするなど、小さなことから少しずつ行動することにも意味があるのでないだろうか。しかし、日本のことだけを考えるのではなく、昔や今、ロシア人が北方

領土に住んでいて、ロシア人の故郷でもあるのだからロシア人のこともしっかり考えたうえで、行動、発言していくべきだと私は思う。
どれだけ長い時間かかったとしても両国が納得できる結論を出して欲しいと思っている。私自身も、日本とロシアの両国が北方領土問題で正しい方向へと進むように、何か出来ることはないかを探していきたい。

佳作

北方領土現地視察に参加して

京都市立嵯峨中学校
三年 池内 里桜

私は、青少年等現地視察支援事業に参加する機会を頂き、さまざまな研修を通して、北方領土問題について学びました。この現地視察で問題の複雑さ、いろいろな人の北方領土問題の解決への思いを、深く知りました。

日本の最東端、根室市の納沙布岬からは歯舞群島の貝殻島を見ることができ、その近さに驚きました。わずか三・七キロメートル先の島々に、私たち日本人が簡単に出入りできません。また、島の周辺の海で漁するには、ロシアに多額のお金を払わなければならず、豊富な海産資源を自由にとることができないことも知りました。北方領土の島々で育った方にとっては、距離は近いのに実際は遠い故郷。北海道東部で漁業を営む方にとっては、好漁場なのに行けない海。私は、実際に島を見て、そのもどかしさを感じました。

また、私たちは北方領土に含まれる多楽島の元島民の方の話を聞きました。島の当時の生活やお祭りの様子をいきいきと、返還への思いをじっくりとお話ししてくださいました。特に、現在ロシアの人が住んでいて、街の様子が変わっていても、島を訪れると懐かしいと感じるとおっしゃっていたことが心に残っています。領土問題に深くかかわる方の声を聞くことで、北方四島のあり方についてより考えるようになりました。

しかし、未解決のまま経った七十年の間に、北方領土問題が、複雑で解決が困難になっていくことが現実です。

元島民の方々の平均年齢は八十歳を超え、また、北方領土の島が故郷となっていて、現在住んでいるロシア人が増えていきます。日本が領土を得ると、現在住んでいるロシアの人々が住む場所を失い、七十年前の日本人と同じ辛い思いをします。私は、互いの国が理解をし、尊重しながら共存できる四島になることが、良い解決法であると感じ、研修を通して考えました。私たちが直接解決することはできませんが、政府の交渉を後押しすることはできます。第一歩は「正しく知ること」だと思います。日本側からだけの目線だけでなく、ロシア側からも問題を見る、島の現状を知る、こういったことを通し、領土問題に関心を持つことが大切です。

現地視察事業での研修は、私にとって北方領土問題について考えるきっかけとなりました。一日も早い平和な解決を願います。

佳作

戦後七十年の北方領土

京都市立烏丸中学校
一年 福岡 琉

北方領土問題について、過去には日本とロシア(ソ連)との交渉がありました。現在でも北方領土は返っていませんが、ぼくはこの出来事を、過去に起こったことと現在のことをそれぞれで考えていきたいと思っています。

まず過去のことについてです。北方四島は、最初日本が発見して多くの人が住みました。自然が多く、様々な動物が生息している北方四島は、当時の住民に大切にされたと思います。島は広く、日本にとって大切な土地だったと思います。

しかし、この問題の元となる一九四五年、八月九日にソ連が日ソ中立条約に反して日本に対立しました。その後八月二十八日から九月五日の間に、ソ連は北方四島を占領しました。ぼくは、この事はもちろん良いことではなく、国という大きなものが条約に反するというのは、とても大きな問題だと思っています。国同士で「一方的に」ということはあってはならないことです。一九四九年までに、約一万七千人のすべての日本住民が強制退去させられ、自分の故郷が奪われたことに悲しく感じたと思います。この後、様々な交渉が行われたにもかかわらず、戦後七十年たった今も、領土が少しも返ってきていないというのには、大きな問題だと言えます。

そして現在、変わらず日本の領土である四島には、日本人は一人も住んでいません。そこに代わりに住んでいるのはロシアの人たちです。ぼくは、その島に住んでい

るロシア人が日本のインタビューに答えている様子を幾度か見ました。答えた人たちはみんな「北方領土は自分たちのものだ。」ということを行っています。今、住んでいる人たちの多くは、生まれた時から島にいたと思います。また、北方四島周辺は、海産物が豊富で、ロシアにとっても手放したくない島です。

占領されて七十年、返ってこない島。そして定住している島の住民はロシア人。問題はどんどん膨れ上がってきていると思います。この問題解決には、多くの人の理解が必要です。今一度、一人ひとりが北方領土問題と向き合わなければならないと思います。

佳作

北方領土を取り戻すために

京都市立嵯峨中学校
二年 井上 莉沙子

私は毎朝、新聞の一面を読みます。そうしているときよく領土問題について書かれている記事を見つけたことがあるのですが、この北方領土もそうした国際問題の一つです。

北方領土とは歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の総称で、美しい自然と豊かな水産資源に恵まれた日本固有の領土です。しかし、これらの島々は現在ロシア連邦によって不法に占領され、日本人は一人も住んでいません。古くから北方領土は日本固有の領土であり、一度も外国のものになったことはありません。にもかかわらず、北方領土はロシアのものになってしまっています。法的な根拠もないまま、北方領土に対する日本の権利が失われてしまっているのです。

この北方領土問題の解決に向け、現在、政府や北方領土問題対策協会などの人々が、様々な策を考案・実行しています。例えば、パスポートやビザなしの北方四島の交流事業をして、お互いの主張に対する理解を深めあったり、国民運動で大会やパネル展、街頭啓発、署名活動を行ったりしています。また、フェイスブックやツイッタ―などでアカウントを作成し、若い人にも関心を持ってもらうなどの試みも始まっています。

ところが、このような様々な努力がなされているにもかかわらず、いまだに北方領土はロシアに占領されたままです。私は、解決しないのは、問題解決に真剣に取り

組んでいる人の数が少ないのが原因だと思えます。北方領土が大変だということを知っていても、よく詳しいことは知らないという人が多いと思います。実際、私もそうでした。だからまずそういう人に北方領土のことについて知ってもらおうことが大切だと思えます。そうすれば、今まであまり関心がなく、よく知らなかったという人たちの中にも、たくさん協力してくれる人が増え、解決へ一歩近づくことができると思います。

私たち中学生は、将来大人になり、ゆくゆくは日本の中心になっていかなければいけない存在です。そんな私たちが今、日本が抱えている問題のために動かなければこの国は変わりません。知り、考え、行動し、私たちが積極的に問題に関わっていくことが大切です。一つの問題を解決することは、それに苦しめられている多くの人を救うことにつながります。できるだけたくさんの人々が安全に幸せに生活するために、一人一人が真剣に問題に立ち向かっていくことが、現在、日本のみならず、世界に求められていることなのです。

佳作

自分の考えを持ち発信する

南丹市立八木中学校
二年 八木 亨

今、日本には北方領土について問題があります。北方領土というのはかつて多くの日本人が暮らしていた日本固有の領土です。この北方領土は四つの島から成り立っていますが、いずれも日本人は一人も住んでいません。この問題が解決できていない根本的原因是、日本がロシアと平和条約が結べていないことです。

北方領土が占拠された当時、日本とロシアは日ソ中立条約を結んでいました。この条約はお互い侵略行為はしないという内容でした。しかしロシア（旧ソ連）は一方的に破棄し、北方領土に攻めこんできました。だから日本は、全島返還を目指しています。ロシアとしても、不正をってしまった認識があります。ロシアと四島のうち二島は返還しようとしています。しかしロシアの意見になると、面積が圧倒的にロシアの方が大きくなってしまいます。これはあきらかに不平等です。このような事があっては、解決の道には進んでいきません。だから僕はこう考えました。

今、日本に足りないものは、解決への強い意識だと思います。僕の母が北海道に行った時、北海道の町には「全島返還」と大きく書かれた看板があったそうです。北海道はこのようにして自分の意見を伝え、解決への道を探っています。しかし、他の人たちはどうでしょう。か。「自分たちには関係ない」と思っているのではないのでしょうか。僕たちもこの学校の授業で、この問題の

ことをはじめ知った人がたくさんいました。実際に我々国民がそれぐらいの意識、姿勢しか持っていないのです。今の日本を支えてくれている大人の方々はもちろん、これからの日本を担っていく僕たち、子どもたちがこの問題を考えることを放棄してしまうことは、絶対にあってはならないことだと思います。だから今、僕たちから出来る事は、このあつてはならない問題を知ることから始めるべきだと思います。そして、自分の意見を持ち、それを発信していく事が大切だと思います。

僕はこの問題についてロシアは日本に全島返還するべきだと思います。そのためには、国民一人一人がこの問題について考え北海道の人たちのように、自分たちの意見を発信していくことから始めるべきだと思います。

佳作

ふるさとの島

南丹市立殿田中学校
二年 芦田 菜摘

「元気なうちに島を返してほしい。」
これが元島民の願いだ。戦後七十年がたち、元島民の高齢化が進んできた。自分が生きていく間に、ふるさとである島に戻りたいという願いが込められている。

日本が抱えている領土問題の一つに北方領土問題がある。択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島の島々を北方領土といい、この北方領土は、一度も外国の領土になったことのない日本固有の領土だ。第二次世界対戦終了直後、ソ連に占拠され、その後三年間で日本人の全島民が強制退去させられた。夜の間、島を脱出した人、島に残り劣悪な環境の樺太経由の引き上げを余儀なくされた人もいる。

私は北方領土問題解決のために行われている事業はあるのかと思いついて、「ビザなし交流」の存在を知った。日本とロシア連邦とで北方四島交流、いわゆる「ビザなし交流」を実施している。この交流は訪問事業と受入事業の二つに分けられる。相互訪問による交流だ。平成四年から実施され、二十年以上続けられている。この交流は、日本人であれば誰でも参加できるわけではない。元島民とその家族、報道関係者、北方領土返還要求運動関係者等に限定されている。

では、今の私にできることは何だろうか。一番簡単なのは、北方領土についてよく知ることだ。北方領土について場所も何も分からないという日本人が三割以上いる

といわれている。私は北方領土についての理解を多くの国民がすることが必要だと思う。

「ビザなし交流」を通して北方領土問題における日本の主張がロシア住民にも知らされてきた。日本や日本人に対して間違った印象を持っているロシア人は少なくない。しかし間違った印象を持つことは、日本人にもあるかもしれない。私もロシアに不正に領土を奪われたという印象が先走り、悪い印象のほうが強かった。ロシア住民の方々の中には、交流でとてもよい印象が変わったという人もいたという。

私は、少しずつ慎重に問題解決を進めていってほしいと思う。戦争については、さまざまな番組で伝えられているが、北方領土についてのニュースはあまり見ない。だからこそ、テレビなどで国民の北方領土に対する意識を高めていくことが必要なのではないだろうか。

佳作

北方領土

京丹波町立和知中学校

二年 山口 紘弥

北方領土とは、北海道の北東洋上に連なる択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島のことを指します。僕はこの北方領土について調べてみました。

北方領土は日本人によって開拓され、日本人が住んでいた日本固有の領土でした。しかし一九四五年八月の第二次世界大戦直後に、ソ連軍により不法占拠され、日本人が住めない島々になりました。自分たちの手で開拓したのに住めなくなり、住人だった人々のことを思うと悲しいことだと思いました。

現在も政府により返還を求めています。難航しています。現在そこにはロシアの人たちが住んでいます。しかし日本に返還されると、今住んで入る人たちは別の場所に住まなくていいけないので、以前住んでいた日本人と同じことになりそうです。そのことについては、住んでいる人たちがかわいそうだと思います。

返還が実現すると、北方領土海域はカニや昆布などの水産資源に恵まれてるので、漁業も今まで以上に盛んになり、国民の食卓にもいろいろな魚介類が並び、食に対する関心も高まるのではないかと思います。しかし今は、漁業面でロシアとの間で制約があり、高額な金額を支払うことにより水産資源を確保していることを知り、びっくりしました。近隣の人たちは漁業を中心とした仕事をしている人が多く、この規制がだんだん厳しくなる漁業にも影響が出るので大変だと思います。そしてそ

れは私たちの生活にも影響を及ぼします。反対に、水産資源を採りすぎるのもよくありません。考えながら漁をすることが大切になります。

さて、一九九二年からビザなし交流が始まりましたが、調べてみると、北方領土への墓参もロシアとの話がうまくまとまらず行けないときもあったようです。数年前からは、身分証明書による渡航ができるようになりよかったです。昭和三九年から昨年までの間に墓参に行かれた方は四三六〇人です。

また、北方領土対策本部では、多くの人たちに北方領土問題について知ってもらおうといろいろな企画をされています。八月は「北方領土返還運動強調月間」になりました。また、二月七日が「北方領土の日」だと知り、他にも全国でいろいろな催し物などが行われています。それらを含めて、僕たちはもつと北方領土問題に関心を持つことが大切だと思います。

そして日本には北方領土問題の他にも、竹島や尖閣諸島の問題がありますが、相手の国としっかり話し合い、お互いが納得して問題の解決に向かうことを願います。

佳作

北方領土の「思い」を叫ぶ

京都府立園部高等学校

一年 岡本 滯奈

初めて北方領土の風景を見た。今夏北方領土を訪問した先生に、写真を見せていただいたのだ。そこには、青い空が続き、様々な家が建ち並び、沢山の笑顔の人々が写っていた。それは、どの国ともそう変わりない光景だったことに、私は少し感動した。

しかしふと、私はこの感動に違和感を覚えた。それは「どうして写真を見ただけで感動したのか」という違和感だった。気付けば、私が北方領土と聞いて頭に浮かべていたのは、北方四島の地図だった。

私は北方領土を「島」として認識していたのだと悟り、シヨックを受けた。その北方四島の地図の奥には、今も昔も人の生活の営みがあることを忘れてはいけない。

ロシア政府はどんどん北方領土の開発を進めている。ニュースは、北方領土をロシアの本土に近づけていくことで、住民の定着や外国からの投資を図っていると報じていた。

北方領土問題が、まるで資源の取り合いのように語られることがある。私もそう感じてしまうことがある。しかし、北方領土にあるのは「資源」ではなく「思い」なのだ。終戦後、突然強制退去を要求され、今もなお心に傷を持ち続けている日本人の元島民の方々。また、その退去中、寒い船上生活や樺太での厳しい抑留生活の犠牲となり、亡くなった方々。さらに、ロシアによ

る開発が進められていくなかで、北方領土が必要不可欠な存在となり、日露の問題を感じながら生活しなくてはならない北方領土在住のロシア人。そんな人々の思いが、北方領土には詰まっている。彼ら彼女らは、この北方領土問題における被害者だ。

では、加害者は一体誰なのだろうか。それは、不法占拠を強引に続けるロシア、またはそれを止められなかった日本の国や政府だ。もしそういう考え方を持っているのなら、今すぐその考え方を捨てて欲しい。そして、加害者は私たち一人ひとりでもあることを自覚して欲しい。

世論調査によると、日本人の北方領土問題の認知率は八〇%近くある。確かに学校の授業やニュースでも大きく扱われる問題で、知らない人の方が明らかに少ない。にも関わらず、一向に進展しないこの状況は、私たちがこの問題に対し、見て見ぬふりをし続けてきたことを裏付けている。北方領土問題は誰かが勝手に解決してくれる問題なのではない。私たちが、北方領土にある「思い」に気付き、知って、受け継いでいくべき問題なのだ。

一人一人の声は小さくても、大勢で叫べば世界中に届く大きな声になる。私はこの問題について「認知」ではなく「理解」をして、北方領土の「思い」を叫び続けたい。そして、共に叫ぶ人が増えることを願う。

佳作

北方四島を取り戻すために

京都府立須知高等学校
二年 南 誉

まず、北方四島が日本固有の領土であることを主張するにあたって、外国人が定住した痕跡がなく、外国人の支配下にあつたという事実はありません。また、北方四島の破棄を求められるような国際的な取り決めも存在しません。日本は過去に千島列島をサンフランシスコ条約で破棄していますが、この千島列島に我が固有の領土である北方四島は含まれておらず、同時期に行われた、アメリカ・イギリス・ソ連、三国の秘密協定であるヤルタ協定は、領土移転の効果がないことを当時国である米政府も公式に認めています。

そして、これまで北方四島の開拓は日本人の手によつて行われ、北方四島全体で約一万七千人の日本人が住んでいました。しかし、ソ連が一九四六年までに、すべての日本人を強制退去させたという事実があります。それ以降、今日に至るまで、ロシア（ソ連）による不法占拠が続いています。そのため、いまだに故郷に帰ることができず苦しんでいる日本人島民がいます。その人々の平均年齢は七八歳を超えています。一方、平成二四年三月末の調査で、択捉島七三五五人、国後島六七一人、色丹島二八〇二人、歯舞群島〇人、合計一六八四九人のロシア人が暮らしていることがわかりました。

私は、こうして北方四島で暮らしているロシア人がある中で、故郷である北方四島に帰りたくても帰れない

人がいるということ、北方四島の放棄を求められないような法的効果をもつ国際的取り決めがないにも関わらず、北方四島の放棄を求められている現在の状況に疑問を感じます。そして、少なくとも北方四島を利用する権利を平等にするべきだと思います。

では、北方四島を取り戻すために、今、私たちにもできることはないのか、微力ながらも私たちにもできることはあると私は思います。例えば、署名を集めたり、ポスターを作つて目の届く所に貼つたり、自分の知っていることを周りの人に話すなど、まず私たち一人一人が意識するだけでも、現在の北方四島を知る人が私たちの周りから一人でも増えていくだけでも、少しずつでも変わっていくと思います。

第10回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

発 行 平成28年（2016年）2月6日

編 集 北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内
京都府北方領土教育者会議
〒622-0041 京都府南丹市園部町小山東町藤ノ木21
京都府南丹教育局内

制 作 株式会社 田中プリント